



羅針盤

福永 淳

Atsushi Fukunaga

神戸大学大学院医学研究科内科系講座皮膚科学分野 准教授



進化する蕁麻疹診療 ～病型鑑別の重要性

皮膚科の医師は他診療科の医師と比較して患者さんから「何が原因ですか?」という質問をよく受けると思う。皮膚疾患はたとえそれが慢性の疾患であっても、「糖尿病や高血圧などの皮膚科以外の疾患と比べて明確な外的な原因が存在する、もしくは簡単に原因が判明しやすい」と患者さんは考える傾向があるようである。

例えば、車のボディの異常とエンジンの異常のどちらで原因が判明しやすいと感じるのかについては、容易に想像ができる。車のボディが傷ついた時のように、蕁麻疹を含めた皮膚疾患は直接的で外的な原因を突き止められることが多いのも事実である。しかし、残念ながら実際は原因を突き止められないことも多く、「すべての皮膚病の原因がわかるわけではありません。ちなみに血圧が高くなる原因について考えたことはありますか?」などと苦肉の策の話をして納得してもらった経験がよくある。とくに慢性蕁麻疹に関しては、自己免疫が関与する可能性があるという情報程度しか患者さんに伝えることができず、専門医として歯がゆい思いをしてきた。

Visual Dermatology としての蕁麻疹の特集は約 16 年ぶり (2005 年 7 月号以来) とのことであり、本誌に目を通してもらえれば、蕁麻疹の病態解明や治療の進歩に関してこの分野の研究の急速な進歩に気づいていただけたと思う。そして刺激誘発型の蕁麻疹はもとより、特発性蕁麻疹であっても、その原因について患者さんへの説明ができる時代になったことを実感してもらえるであろう。

蕁麻疹は皮膚科のみならず、医師であれば経験しないことはない、ありきたりな疾患である。治療に関しても多くの病型で抗ヒスタミン薬が用いられるため、プライ

マリケア医としての初期対応に関して問題になることは少ない。

しかし、慢性蕁麻疹へのオマリズマブの有効性の検証が足がかりとなり、慢性蕁麻疹の病態解明のブレークスルーから各病型における病態が矢継ぎ早に明らかとなった。蕁麻疹の病型に応じた病型特異的な治療法も開発されつつある。また表現形は蕁麻疹と類似しているがその病態が似て非なる自己炎症性疾患や、メディエーターが肥満細胞由来のヒスタミンではなくブラジキニンである遺伝性血管性浮腫といった稀少疾患でも疾患特異的な治療法の開発が進んでいるため、日常診療ではその鑑別を要する。つまり、蕁麻疹や血管性浮腫のようなありふれた症状の患者さんを診たときに、問診とそれに引き続く検査に基づいて病型を鑑別することが非常に重要な時代に入ったといえる。

本誌では「蕁麻疹診療ガイドライン 2018」の中に含まれる病型を鑑別するために、診療実地上問題となる具体的な検査や誘発の方法について、ガイドラインには記載されていない内容を含めて症例提示で詳細に記載してもらっている。ぜひ病型診断のための検査を行う上で参考にしていただきたい。

ヒトでは common な疾患である蕁麻疹だが、他の動物ではなぜか common な疾患でないようである。ヒトは進化の過程で蕁麻疹という表現形を獲得したのかもしれない、ヒトの皮膚を考える上で蕁麻疹は欠かせぬ存在かもしれないと、筆者は妄想している。最後に、お忙しい中興味深い原稿をお寄せくださった執筆の先生方、責任編集のお声がけをいただきました Visual Dermatology 編集委員会の先生方に感謝を述べたいと思います。